

2023/05/30

第8章 研究のプロセス/第9章 研究設問

第Ⅲ部 研究デザイン『質的研究入門』ウヴェ・フリック

K原

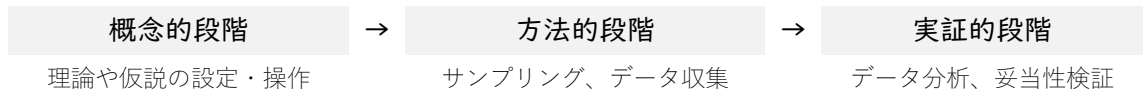
- 質的研究はどのようなプロセスを経て行われるのか？
- 量的研究とのプロセスの違いはなにか？
- どのような問い（研究設問）を立てると

→必ずしも全ての質的研究のプロセスがGTAに基づいているわけではないが、質的研究は全体的な研究プロセスが依存しあってははっきり分けられないことを示すために、それを明確に打ち出しているGTAを挙げている？

第8章 研究のプロセス (pp.106-15)

※本章の「理論」とは、研究対象に関する仮定を意味する (p.115)

- 質的研究には、量的研究とは異なる役割がある。質的研究・量的研究が組み合わせ不可能なわけではないが、交換可能なわけでもない (p.106)。
- 量的研究の場合、研究は直線的なプロセスをたどって行われる↓ (p.107)。1つの段階を終えてから別の段階に取り掛かる。段階を分けて扱うことも可能。



- 一方、質的研究の場合、全体的な研究プロセスが依存しあっており、はっきり分けることはできない。(例：グラウンデッド・セオリー・アプローチ、以下GTA)

1) 直線的プロセスをたどる研究 (p.107)

- 量的研究は数量化を目的としている。このような研究の場合、上記のような直線的プロセスをたどり、フィールドに入る前に、まずは「机の上」で理論的仮定(モデル)を形成しておく(文献や過去の実証研究から得られた理論的知見をベースに仮説を導く)。
 - 量的研究においては、典型例と思われる調査対象が選ばれ、仮説の検証が行われる。データと調査結果の代表性 representativeness の確保に重きが置かれる(典型例から全体的な傾向をみたいので、母集団を代表できているのかが重要になる)。
- 必ずしも「量的研究は直線的、質的研究はそうではない」とは言えないのでは？

2) グラウンデッド・セオリー研究におけるプロセスの捉え方 (pp.107-10)

- 直線的プロセスを辿る量的研究とは対照的に、GTAでは机の上でまず理論的仮定をつくるのではなく、まずデータや調査現場が優先される(≠机の上)。まずデータや現場があつて、そこから理論的仮定が発見される。理論的知識ありきの仮説の設定を最初に

行うのではなく、その知識をとりあえず括弧に入れておく（「最初から理論的知識をもとに決めてかからない」ということにまとめられる?）。

- 代表性よりも、研究テーマとの関連性を重視して調査対象が選ばれる。
- 「研究対象の構造化を後回しにする」「理論的観点のもとで(研究設問は)作成される。しかし研究設問を仮説の形にするということはない」(Hoffmann-Riem 1980:345)
- どうしても選択を行う際に、自分が主観的に期待するものや持っている傾向を追ってしまうが、これは行なってはならない(といいつつ、あとで部分的に使うにしても～という話もしているが、別の話なのか?)。なぜなら、それ以上の事柄を見つけることができなくなってしまうため。主観的な傾向を追うと認識が歪む。
- GTAには複数の構成要素が含まれており、その全体的な脈絡から独立して自立した意義をもつものとして扱われる傾向がある。しかし、そのような場合には、個別の要素の背景にあるグレイザーらのアプローチの一貫性が無視されてしまっている。※GTAはグレイザーとストラウスによって提唱された。

3) プロセスの直線性と循環性 (p.110)

- GTAの本質的な特徴は、調査プロセス部分の循環的な関係である。
- この循環構造によって、研究者は調査プロセス全体をつねに振り返り、他の研究段階に配慮しながら特定の段階に取り組むことになる。
→「段階」という言葉を使って説明している。GTAは、とりあえずの段階というものはあるが、それは必ずしも直線的に進むものではなく、各段階でデータや調査現場をもとに、諸々調整したり本当に決めてかからずに進めていく、という理解でよい?

4) 世界のバージョンとしての研究プロセスにおける理論 (p.110-5)

- 理論とは世界のバージョンである(=アップデートされるもの)(Goodman 1978)。
- あくまで理論は既存の事実の世界のバージョン、視点である。

たしかに決めてかかることは視野を狭めてしまいそうだが、机の上でまず仮説を立てないでフィールドに出るにしても、そこで見たり聞いたりしたことの分析には、どうしても主観が含まれてしまうような気もする(無意識に自分が見たいものを見ているような気もする)。この分析部分も、「調査プロセス」の中に含まれているように思うが、GTAはあくまで仮説を立てる時に「机の上」の理論的知識のみで仮説を立てるな、というだけの話ではないよね?

自分の研究がGTAのような循環型なのかあるいは直線的なのかと言われると、どっちとも言えるような気もする。大事なのは循環なのか直線なのかではなく、データやフィールドを見ずに、机の上で理論や仮説を設定するなということ?

第9章 研究設問 (pp.116-26)

1) 設問を刈り込む (pp.117-8)

- 研究設問を決めていくのに、どうしても何を尋ねるのか、実現可能性（時間・期間的制約や、資金などの限度など）も考慮して絞る必要が出てくる。特に、1回限りのインタビューでは、設問の刈り込みが重要になってくる（繰り返し行われるインタビューでは、変更が容易に可能）。

2) 関心領域の特定化と研究対象の限定 (p.119)

- 調査現場には様々な側面が存在する。
- どのように尋ねると・誰に尋ねると、自分が欲しいデータをとることができるのか、関心領域を特定し、研究対象を限定する。

3) 感受概念と視角のトライアングレーション (p.120-1)

- 研究設問を検討する時に、どの側面を本質的なもの—二次的なもの、扱いの可能なもの—不可能なもの、関連するもの—関連性の低いもの等々とみなし、外していくかを決めなければならない。どの側面を無視しつつ、扱いたいことが失われないようにするのか？（＝「摩擦による損失」）これには2つの対策が考えられる。
- 1つが、感受概念を使用すること。これにより、研究対象に関連性の高いプロセスを捉えることができる。これは、どう聞けばとりたいデータがとれるのか、どのような言葉にすればそれについて話してもらえるのかということ？例えば、教育・学びに関して、学校の先生のことでも聞きたいし、学校全体の様子も聞きたいし、家庭の様子も聞きたい、というときに、1回きりのインタビューでどのように尋ねるのが重要になってくる。そこで、どれについても話してもらえるように、例えば「学習環境」という言葉を使うということは、ここで言う「感受概念」に該当する？
- もう1つが「摩擦による損失」を視角のトライアングレーションによって抑えること、つまり、複数の視角や方法を組み合わせること。これにより、ひとつの問題の色々な側面をできるだけ多く取り入れることができるようにする。

4) 研究設問のタイプ (pp.121-5)

表 9.1 の図式がピントと来ていません…

- そもそも研究設問とは、形作った理論や仮説の妥当性を検証するための設問であって、例えばインタビューを行う時に尋ねる質問ということではない。
- 研究設問のタイプには、状態の記述と、プロセスの記述がある。
- 重要なポイントは、既存の仮定の証明にどれほど適したものか、あるいは「生成的な問い」新しい仮定の発見をどれほど目指したものか（少なくとも新しい仮定の発見をどれくらい許容するか）。

研究設問の定式化は、質問項目の作成とは違う。研究設問の定式化は、自分の研究プロジェクト全体を導く問題を定めるとのことである (p.124)。

ここで言う研究設問というのは、仮説の検証のためになにが問われるべきなのか、どのような問いを
追いつけるべきなのか、ということ？